

樹の皮

片柳 草生

イタリアのサルディニア島へ旅をしてきた。

出発の三日前、どうにも体調が優れない。すぐ横になりたくなってしまふ。

もともと季節の変わり目は気温の変化に適応できない体質のだが、一体どうしたことやら。あさってから海外だし、念のため近所の医院へ行ってみた。

「そんなこと言われても……判断の仕様がでないじゃないか」と、先生はぶつぶつ。「とりあえず血圧を計って」と看護士さんに指示を出した。血圧計を見た

看護士さん、「えっ！ ちょっともう一度計り直します」「あら、やっぱり。二一九です」。先生「なに！ もう一度計って」。やっぱり二〇〇を超えていた。

「普通の人だったら病院へ来ることもできない数字。なにかあれば死んだっておかしくないほど高いんだから、これは薬を飲まなきゃだめだ」

「でも血圧の薬って、一生飲み続けなくちゃならないですよね」

「なにを言ってるんだ。とにかく家で今夜と明朝に計って、又午後来なさい」

とうとう大嫌いな薬を飲むはめになって、目覚まし時計を日本時間にセットしながら薬タイムをクリア。無事に帰国できた。

前回に「ピルケース」を取り上げたのは、虫の知らせだったのだろうか……。

出発前、ピルケースを並べて桜皮の薬入れに決めた。一粒ごとパック包装されている薬は、愛らしいピルケースには収まらないのだった。

桜皮は、山桜である。片面はざくつとした霜降り皮で、反対側は赤紫をした漆のような肌合いの飴皮。山桜の皮は、磨くことによって艶を帯びてくる。年



写真／宮下直樹

月や環境が与えた複雑な天与の模様が踊り出し輝く。

葉は憂鬱だったが、蓋を開ける度にもうすぐ訪れるであろう日本の春を思い出させた。凸凹した樹皮の手触りが吉野の山桜へと誘う。いつか見た老樹の大木から乱舞していた花びらを思い浮かべながら、苦手な薬をうっと飲み込んだ。

東北には、樹皮を剥ぎ取り撓めて綴じて生活道具にしたものもあった。かっこべと呼ばれる荒っぽいが存在感のあるかごで、遠野で三〇年近く前に出会った。雪の深い時期、柚人の冬仕事で、荒物屋へ持ち込んだという。柚人にかごのことを聞きたかったが、主人は「名前もわからない」と言った。写真のかっこべは、その時の一つ。作り手が絶えた今、貴重なかごになった。バスでサルディニア郊外を走っていたら、どの樹も真ん中がぐるりと剥り抜かれている林が続いた。コルクガシの樹だという。ワインの栓がこの樹皮だということも、イタリアワインの八〇%が、サルディニア産の栓だということも初めて知った。土産物屋に、コルクで作ったポーチがあった。薄く剥いで刺繍をしてある。でもコルク自体の模様は魅力的とはいえない。あらためて山桜の天賦の恵みを思い、それを生かす日本の仕事の端正さを実感したのだった。